博士学位論文概要

『日本霊異記』の作品論的研究

荒川　聡美

一．目次

序章
第一部　説話の型と配列からみる『日本霊異記』の構成
　第一章　説話の配列――話型という観点から――
　第二章　蟹報恩説話
　第三章　鬼の説話
　第四章　善悪報譚
第二部　時空表現からみる『日本霊異記』の構想
　第一章　「昔」という時代表記
　第二章　「天皇」という存在
　第三章　時代基準としての「天皇」
　第四章　唐・朝鮮半島という視点――「自土」の自覚への契機――
第三部　近世における『日本霊異記』
　――仮名本および本文校訂における再作品化――
　第一章　仮名本の成立事情
　――漢字本写本および『今昔物語集』との関係をめぐって――
　第二章　狩谷棭斎の『日本霊異記』研究――『日本霊異記攷証』を中心に――
終章

二．概要

序章

本論は、日本最古の仏教説話集である『日本国現報善悪霊異記』（以下『日本霊異記』）が、どのような意図をもって編纂されたのかを検討すること、および近世において『日本霊異記』がどのように享受されたのかを分析することの二点を目指したものである。

『日本霊異記』の先行研究においては、従来採録された個々の説話に着目した論が展開されてきた。先学の成果では、『日本霊異記』の各説話がどのような神話・民話をもとに形成されたかが論じられてきた。そして、そのような神話・民話の影響がみられる説話や、史書との関連が深い説話、奇抜な内容の説話などが研究対象として取り上げられる傾向に

あった。

このような個々の説話の内容や由来を詳細に論じることは、『日本霊異記』の各説話がなぜ現存のような形で伝わっているのかを理解するのにあたって有効であろう。その一方で個々の説話に注目してきたことで、『日本霊異記』全体がどのような構成で編纂されたのかという課題については、いまだ検討の余地があるように思われる。

本論では、これらの研究史を受け、『日本霊異記』全体の構成を視野に入れて論を進めていく。『日本霊異記』は上巻序文によれば、編纂者景戒が唐の『冥報記』や『金剛般若経集験記』に影響を受けて、「自土の奇事」、つまり日本における奇事を採録することを目標として作られた。そして、その編纂方針の根底には、善行は善報につながり、悪行は悪報につながるという思想が存在する。この仏教的思想を証明するために『日本霊異記』はさまざまなテーマを用いて説話を語る。しかし、その手法はテーマのバリエーションを多くするというだけではなく、むしろ類似したテーマの話（類話）を複数回にわたって語るという方法も採っている。

第一部ではこのように説話配列にある一定のパターンがみられることを確認する。そして、説話間の共通点を手掛かりにしつつ検討を進める。具体的には、蟹報恩説話・鬼の説話・善悪報譚を取り上げ、共通のテーマを一つの説話集において繰り返すことの意義を見いだすことを試みる。

以上のように、本論では、『日本霊異記』を、「説話」という微視的な観点から眺めるだけでなく、一一六の話を集めた一つの「説話集」という巨視的な観点から分析することを目標とし、従来の研究に一石を投じたい。

続く第二部では、さらに視野を広げ、『日本霊異記』という「説話集」全体に広く通用する概念及び語彙に着目する。『日本霊異記』の時代表記には、複数の様式があり、天皇代で時代を表すもの、年月日を記載するものなどが挙げられるが、第一章では、そのなかでも「昔」という広いくくりで時代を表す説話に着目し『日本霊異記』内の「昔」の語の用法について検討する。第二章・第三章では、『日本霊異記』に登場する天皇について述べる。『日本霊異記』における天皇について、説話内の登場人物としての役割を確認したのち、説話において時代基準としての機能を担わされた存在としても検討する。さらに第四章では、『日本霊異記』内における唐・朝鮮半島に関する説話を概観し、近隣諸国のとらえ方を論じる。

このような『日本霊異記』全体に見える概念や語彙は、複数の用途で使用されている場合がある。第一章および第四章では、これらを厳密な用途別に分類したのち、総合的に分析するという手法をとる。また、この第二部では『日本書紀』や『続日本紀』などの史書や、仏典との関わりにも触れ、『日本霊異記』がさまざまな資料の影響関係のなかに成立したことを表現の面から分析していく。そして、天皇や他国との関わりを述べることで、『日本霊異記』内の自土意識および国家意識についても明らかにしていく。

このように、第一部・第二部では漢字で記述された平安期成立の『日本霊異記』を研究対象とする。しかし、近世における国学者の『日本霊異記』研究および仮名本『日本霊異記』の存在も、『日本霊異記』編纂を研究目的に据える本論においては見逃すことはできない。なぜならば、近世において流布した金剛三昧院本系の写本は、二十三話が欠落しているだけでなく、十四話が他文献との重複や類話の存在を理由に意図的に省略されている。そして、この金剛三昧院本系の写本をもとにして作成された『日本霊異記』仮名本は、平安期成立の漢字のものと配列が異なっている。これは、近世における『日本霊異記』の形成において、平安期のものとは別の価値観が働いた結果といえよう。よって広く『日本霊異記』の編纂を考えるためには、近世の文献も検討対象とすべきと判断し、第三部では近世における『日本霊異記』の存在について検討を加えた。

『日本霊異記』は近世に至るまでまとまった研究成果が見られず、金剛三昧院本系の一つである三手文庫本に書き入れを加え、『日本国現報善悪霊異記注』を記した契沖の研究がその嚆矢といえよう。一方、漢字で書かれた『日本霊異記』を仮名にやわらげた仮名本は正徳四年（一七一四）に刊行され、『日本霊異記』の存在は仮名本によって広く知れ渡ることとなった。しかし、写本事情をみると当時は欠落の多い金剛三昧院本系の流布本が主流となっており、本文研究をするのに恵まれた環境とはいえなかった。そんな中、仮名本や『今昔物語集』・『扶桑略記』を利用し、本文校訂を試みたのが、狩谷棭斎である。棭斎はのちに真福寺本の模本を手に入れ、校訂された本文である『校本日本霊異記』を発刊し、さらに説話に注釈を施した『日本霊異記攷証』を上梓した。第三部では、近世における『日本霊異記』事情に大きな影響を与えた仮名本の本文の内容を検討するとともに、『日本霊異記攷証』にかいま見える狩谷棭斎の研究態度について論じる。

以上のように、本論は平安期成立の『日本霊異記』と近世の『日本霊異記』の双方を検討することにより、『日本霊異記』がどのような編纂・伝達の過程を経てきたのかを、総合的に分析する。

第一部　説話の型と配列からみる『日本霊異記』の構成では、『日本霊異記』における説話の配列方法ついて一定のパターンがあることを確認した上で、話型に沿って各説話の表現のあり方を分析した。

第一章　説話の配列――話型という観点から――

『日本霊異記』には、同じ内容の説話、いわゆる類話が多く含まれている。それらがどのような順番で配列されているのかという観点から、『日本霊異記』の構成を検討した。本章では、類話に関する複数の先行研究から話型を定義し、配列のパターンを探った。景戒が、時代順配列の法則にとらわれずに同じ話型の説話を連続して配列する箇所も見られ、より仏教の因果の理を印象づけようとしていることが推察された。また、二つの話型が連続して配列されている箇所について考察をすることで、より効果的に仏教の因果の理を説

こうとしている可能性が窺われた。

第二章　蟹報恩説話

蟹報恩説話といわれる中巻第八縁と中巻第十二縁は、主人公の女が蟹と蝦の命を救う点、蛇と婚姻することになるも蟹によって助けられる点、行基に救いを求める点などが共通しているが、行基についての記述や、主人公の女性像などに違いがみられる。中巻第八縁では、寺院関係者でありながら、まるでその立場に相応しくないような行動をする女性が描かれ、しかしそのような女性でも、放生によって再度仏教の加護を受けられる可能性が記されている。そして中巻十二縁では、仏教関係者ではないものの、心から仏教を信じている女性が、信仰に基づいた日頃の行いによって仏教の加護を受ける可能性が描かれている。一見似ているように思われるこの二話をともに採録することは、多様な信仰のあり方を示したいという編者景戒の態度の表出である。

また、配列の側面から見たとき、この二話が異なる話型の連続配列の影響下にあることを論じた。この二つの類話は連続した配列でなく、中巻第七縁から第八縁、第十一縁から第十二縁という配列になっている。僧を迫害することでもたらされる悪報の恐ろしさを述べ、次に、『日本霊異記』において偉大な僧とされる行基のすばらしさを述べるというこのサイクルは、「僧」への信仰を強調するという意味で、効果的に機能したといえよう。

第三章　鬼の説話

本章では、中巻第二十四縁・二十五縁の、主人公から賂を与えられた冥界の使者である鬼について検討した。当該二話の「鬼」を上代の文献や『日本霊異記』内の「鬼」の用例と比較すると、「冥界の使者」としても異例であり、『日本霊異記』全体の「鬼」の用例から見ても異例といえる。つまり、「風土記」や『日本書紀』の例のように「害をなすモノ」という性質をもった存在ではなく、「人間性を保持した死霊的な鬼」とみるのがよいと考えられる。そして、このような人間的な「鬼」が描かれる事情には、『日本霊異記』で重要な「恩」という概念が関わってくる。当該二話の「鬼」は、賂に「恩」を感じた為に主人公を救おうとする。『日本霊異記』世界では「恩」に報いることは、なすべきことであり、むしろ「恩」を返さないことで、悪報を受ける話もある。つまり中巻第二十四縁・二十五縁においてこのような人間的な「鬼」が描かれた事情とは、『日本霊異記』を貫く「恩」という概念の強調ではないかと推測するのである。人間のみならず、「鬼」すらも「恩」をないがしろにしないというある種の矛盾を語り、それにともなって展開する奇異な出来事を綴ることによって、より印象的な話につくりあげているのである。

また、類話の連続配列という観点から見ると、題も似通ったこの二話をまとめることによって、足りない部分を補い合い、「賂される鬼像」に広がりを持たせることを可能にしているといえる。

第四章　善悪報譚

『日本霊異記』には、「――而現得善悪報縁」と題され、善行と悪行がともに語られる説

話が四話ある。このいずれも、悪行によって冥界に行った後、生前の善行によって生き返るという蘇生説話であり、同一人物が悪報と善報をともに経験し、その因果を語るためのものとして、中国の蘇生説話の受容の中で生み出された型である。『冥報記』の蘇生説話は、冥界に行く前の描写が簡潔であり、『日本霊異記』中巻第五縁、下巻第二十二縁、下巻第二十三縁も同様の傾向にある。一方で、中巻第十六縁のみが、冥界に行く前の悪行と善行を詳細に語っていることから、『日本霊異記』の主題の一つである人々の生活に即した描写がなされた説話であると考えられる。『日本霊異記』が独自の視点で説話を語ることは様々な点から指摘がある通りだが、そのような傾向は「善悪報譚」にも見られるということを指摘した。

第二部　時空表現からみる『日本霊異記』の構想

では、『日本霊異記』内に共通する語を手がかりとして論を進め、『日本霊異記』全体に通底する編纂意識を検討した。

第一章　「昔」という時代表記

本章では、説話配列を考える上で重要な時代表記をより詳細に検討する試みの一つとして、「昔」という語をとりあげた。『日本霊異記』における「昔」の用例を、Ⅰ序文における用例、Ⅱ各説話の冒頭において説話の時代を示す用例、Ⅲ説話内で過去の時を示す用例、Ⅳ引用文における用例の四つに分けて検討した。Ⅳの用例において経典等引用の確認できるものは、引用元との比較を行うと、引用元が「昔」とは異なる語を使用している場合がみられる。このことから、『日本霊異記』は、引用文において過去を示す際に、「昔」という語を使用し、ある程度の統一をはかろうとしていることが考えられる。

また他Ⅰ～Ⅲの「昔」の用例をみると、連続性を持った過去でなく、語義どおり「今」と対立した過去を表していることが確認できる。すなわち『日本霊異記』において「昔」という語は、時代順配列を意識した『日本霊異記』という説話集における歴史時間の軸においても、また個々の説話における登場人物の輪廻転生の軸においても、「今」と対立した過去を意識した上で、意図的に用いられているのである。

第二章　「天皇」という存在

『日本霊異記』には、天皇の行動が窺われる説話が複数話存在する。それらの説話に登場する天皇は、その大半が、説話の主人公として描かれてはおらず、説話の主人公を仏教の道へと誘導する役割を果たす存在、もしくは主人公が仏教と関わる際の契機となる存在として描かれている。また、天皇が出現する説話のいくつかは、歴史書との関わりが深い可能性が挙げられる。天皇が歴史上の記述や人物と、仏教的な関わりをもつ点を強調することにより、読み手に仏教の功徳を強調していることが推測される。

第三章　時代基準としての「天皇」

『日本霊異記』の説話は、基本的に時代順配列であり、その基準は天皇代を原則としている。一方で、『日本霊異記』には語られない天皇代が存在する。ただ、それらの天皇代の

出来事が書かれていないわけではない。説話の内容を読めば、時代を推測できる場合がある。本章は『日本霊異記』の説話と史書とを照らし合わせ、天皇名が記述されなかった事情について検討した。

天智天皇代については、編者景戒が『日本書紀』等の正史を重視するあまり、不備のある『日本書紀』天智天皇条の年号の使用を避けたとの一案を提示した。また、元正天皇代については、『日本霊異記』中で高く評価される行基を指弾し、さらに私度僧を取り締まる法令を度々発布したという『続日本紀』における元正天皇像に反して、元正朝の説話が採録されなかったと判断した。

以上のように、上代文献における重要な天皇が出現しないことも、仏教史を語る上での『日本霊異記』の特徴の一端と見なすことができよう。

第四章　唐・朝鮮半島という視点――「自土」の自覚への契機――

『日本霊異記』は、上巻序文によれば、漢土の書物が編纂の契機になったという。本章では、唐・百済・新羅・高麗の国名を手掛かりに、『日本霊異記』がこれらの近隣諸国をどのように捉え、描いているのかを四つの視点から検討する。第一に近隣諸国出身の人物の描写を見ると、説話中の他の人物を奇事へと導く役割を担っていることがわかる。また、近隣諸国の人物の体験が『日本霊異記』内で複数回にわたって繰り返されることで、奇事や善報を認識させようとしていると考えられる。第二に移動先としての近隣諸国の例を検討すると、当時の学問僧の実態を反映していることに加え、日本以外の国においても奇事を体験する可能性を提示していることが見て取れた。第三に時代表記の例においては、百済への派兵を記載することで、日本という国を相対的・客観的に位置づけようとする意図が垣間見える。第四に他国と日本を比較する例からは、対比的な記述によって日本での奇事が強調されており、さらに「日本」という国号がある一定の意図を持って使用され、特に天皇と関連をもたせ国家意識を表していることが窺われた。

以上の検討をふまえると、上巻に集中する近隣諸国の記述は、『日本霊異記』にとって仏教世界への入り口のような存在といえる。これらの国を描くことで、『日本霊異記』は日本にも因果の理があることをよりはっきりと示すことができ、ここに『日本霊異記』における「自土」の自覚が成立しえたのである。

第三部　近世における『日本霊異記』――仮名本および本文校訂における再作品化――

では、近世における『日本霊異記』の受容のありかたを、仮名本を通じて検討する。また、『日本霊異記攷証』の記述方法から、狩谷棭斎の『日本霊異記』に対する研究態度を分析した。

第一章　仮名本の成立事情

――漢字本写本および『今昔物語集』との関係をめぐって――

『日本霊異記』には、元の漢字の文章を漢字片仮名交じりの文に書き換えた江戸初期成

立の版本が存在する。これは「仮名本」と呼ばれており、説話内容の簡略化や改変がみられ、金剛三昧院本系写本のうち延宝本の系統が元になっているとされてきた。

本章では、延宝本の脱文によって仮名本が補訂を施したという論を手がかりに、漢字本中巻第十六縁と仮名本一の十六を検討し、延宝本が仮名本本文に影響していることを明らかにした。一方で、写本だけでは解決できない相違点を明らかにするために、中巻第十六縁と受容関係にある『今昔物語集』に着目し、仮名本で主人公が統一されているという改変が、『今昔物語集』の方針を採用した可能性を論じた。また同様に『今昔物語集』を反映したとおぼしき用例を他に三つ検討した。

つまり、仮名本の本文は、説話によっては『今昔物語集』の表現を採用しており、それは説話をよりわかりやすくするための工夫の一つであったと考えられる。

第二章　狩谷棭斎の『日本霊異記』研究――『日本霊異記攷証』を中心に――

狩谷棭斎の『日本霊異記攷証』（以下『攷証』）は、『日本霊異記』の説話についてはじめて詳細な注をほどこした『日本霊異記』注釈の先駆的存在である。『攷証』は、棭斎による校訂本『校本日本霊異記』の校訂理由を示すことも目的としている。『校本』の上巻は高野本、中下巻は真福寺本の模本である不忍文庫本を底本としているのだが、この校訂作業に際して、棭斎は、一定のルールを定めており、上巻においては、『日本霊異記』を享受した『今昔物語集』や『扶桑略記』も対校本として扱っている。一方、中下巻においては、基本的には高野本によって校訂作業を行い、高野本と他文献の文字が異なるとき、後者の字が有用な場合には併記するという形式をとる傾向にある。そして、棭斎の手元にあった延宝本は、状態が良くないこともあってか、底本に虫損が見られた時のみに使用するという限定的な用いられ方をしている。

また、『攷証』は文字を校訂するにあたって、先人の国学者らの説も引用している。特に本居宣長の『古事記伝』に近い記述を記載しており、おそらく『古事記伝』そのものを見ていた可能性が高い。『古事記伝』にも『日本霊異記』についての言及はあるが、棭斎は『古事記伝』を引用にするにあたって、『日本霊異記』の書名を掲げていない項目も閲覧しており、語句の理解を深めるための材料として『古事記伝』を利用していたことが窺える。さらに一つの項目について、他の先人等の説を複数掲げることによって、よりふさわしい字を探ろうとしている態度が垣間見える。

終章

以上の論によって、『日本霊異記』がどのような意図をもって編纂されたのかを検討すること、および近世において『日本霊異記』がどのように享受されたのかを分析することを試みた。

前者については、第一部・第二部を通じて、全体の構成や共通語彙・概念の使用方針を検討したことによって、仏教説話を示すためのより有効な編纂方針が採られていることが

窺われた。また、後者については、仮名本の具体的な分析から、説話享受にあたって『今昔物語集』の影響があったことを示した。さらに椄斎『攷証』の例から、国学における『日本霊異記』の立ち位置を分析することができた。

『日本霊異記』は、日本最古の仏教説話集である。そしてそれは時代順配列という方針から奈良朝から平安朝への過渡期を描きだしている説話集であり、僧侶・皇族・庶民などあらゆる人物を主人公とし、包括している説話集である。善因善果・悪因悪果を基本的指針としながらも、このような視野の広さを保持する『日本霊異記』は、単なる説話の集合体ではない。景戒によって編まれた作品としての「説話集」のあり方は、個々の説話の検討だけでなく、『日本霊異記』全体に通じる価値観を見いだし、さらに後世の視点からも見つめることによって、よりいっそう明らかになるものと考える。